２１世紀の日本のかたち（７４）

二、三の大学にみるキャンパスのかたち

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

１．日本の大学の姿、形（建築）

現在、日本には700を越す国公私立大学があり、それぞれの地域や都市において、設立の理念を掲げ、高等教育、知の拠点として固有の姿形（建築）をもって、変革期にある21世紀の大波に立ち向かっています。

700 の大学を設立年代から見れば、戦後生まれが多く、限られた敷地条件の中で、時代の建築的流行をポストモダン的に取り込んだ「かたち」づくりをしています。

これに対して、明治年代に設立された旧帝国大学系の大学は、それぞれに日本の地方名を冠にして、東京大学をはじめ、京都、大阪、名古屋、東北、九州、北海道大学などとして、地方の拠点都市に広い敷地を有し、地域の風土を写し込んだ重厚なキャンパス空間を持続させております。

これら旧帝国大学は明治初期に創られた慶応大学、早稲田大学などの私立大学とともに、日本近代化の第一の変換期において、それ自身のかたちづくりと同時進行的に、日本の西欧化、産業化の拠点となり、近代日本のかたちづくりに大きな役割を果たしてきました。

これを建築などの造形面から見ると、日本の建築は和風から洋風へ、和風木造から洋風の鉄とコンクリート造へと大きく変わってきました。この変換にあたって、大学に設置された「建築学科」が大きな役割を果たしました。

東京大学本郷キャンパス

東京大学が本郷の現在地に「大学」として立地したのが明治10（1877）年ですが、この年、工部大学校造家学科（後の建築学科）が設置され、ここに若いイギリスの建築家ジョサイア・コンドルが招聘されました。

コンドルは、学生に西洋の建築術を教えるかたわら、旧東京帝室博物館（現東京国立博物館）、東京神田のニコライ堂などを設計しております。

工部大学校造家学科の第一回卒業生４名の中には、東京駅の設計者、辰野金吾や、慶応大学旧図書館の設計者、曽禰達蔵がおります。

辰野金吾は、工部大学教授として工部大学の校舎を設計し、そのかたちと思想は現東京大学キャンパスに受け継がれているように思われます。

明治期、大学の建築、造形教育などを通して、西欧の建築様式が一定の格式をもって日本に移転されましたが、これには日本の伝統的な建築職人達の高い技術力、組織力の支え

があってこそのものということは特筆されるべき事です。

大学キャンパスの顔は、まず、講堂といえますが、東京大学においては塔屋に時計をもつ内田祥三、岸田日出刀教授設計の安田講堂（1925 年竣工）が有名です。

さらに、安田講堂を有名にしたものに、1969 年正月の安田講堂事件−全学共闘会議（全共闘）などの学生の講堂占拠と警視庁機動隊による封鎖解除の攻防の一コマがあります。

東京大学本郷キャンパスと安田講堂の位置

（出典：東京大学ホームページ）

東京大学大講堂（安田講堂）

（撮影：松本泰生）

当時、1960 年から 70 年にかけ、ベトナム反戦、第二次反安保闘争、大学の閉鎖性などの問題を巡って学園紛争が全国的に広がり、50 を超える大学が、学生たちによりバリケード封鎖がなされました。

この時期、ベビーブーム世代が大量に大学に押し寄せる状況でした。

東大安田講堂事件は、時代状況が重なり、当時の学園紛争の象徴的な出来事でした。

かつて学生たちによって占拠され、荒廃した安田講堂も、今ではすっかり修復され、国の有形文化財に指定され健在です。

文京区本郷、加賀藩上屋敷跡の広大な敷地に、増築しつつ 150 年余の歴史を重ねている東大キャンパスは亭々と聳える銀杏並木を配し、日本のアカデミズムを代表するキャンパス景観をもって、国家と市民社会の間合いを見ながら 21 世紀に向き合っている図に思えます。

慶應義塾大学三田キャンパス

福沢諭吉を創立者とする慶應義塾大学は創立 150 周年を迎えた日本一歴史が長い大学令による私立大学です。

福沢諭吉が築地鉄砲洲に蘭学塾を開設したのが安政５（1858）年、慶應義塾という名称になったのは慶応４（1868）年、三田への移転は明治４（1871）年です。

学祖、福沢の「学問のすすめ」「文明論の概略」などは近代化をめざす明治国家のかたちづくりの大きな指針となりました。

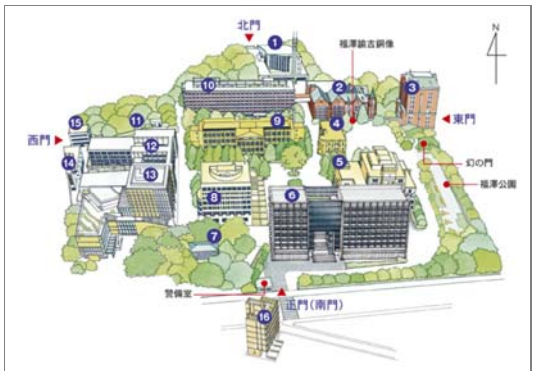
慶應大学は創立以来、実学を重んずる学風があり、この方面に多くの人材を送り出しております。

三田キャンパスには三田演説館と並んで、大学を象徴する図書館（旧）が洋風ゴシック様式建築の赤煉瓦と花崗岩の外観に歴史を受け止めて健在です。

この図書館は慶應大学の創立 50 周年記念事業として建てられた（1912 年竣工）もので、設計は曽禰・中條建築事務所、曽禰は工部大学（東京大学）造家学科の第一回卒業生の一人です。1969 年、国の重要文化財に指定されております。

これら歴史的建造物には「いい垢」が着いております。最近の建築は建設時は見栄えがよいのに、時とともに劣化するのとは対照的です。このことは文明の有り様にとって何か重要な問題を示しているのかもしれません。

慶応義塾三田キャンパス



【1】北館：大会議室、ホール、ファカルティクラブ	【2】図書館旧館：大会議室、小会議室	【3】東館：ホール、G-SEC Lab
【4】塾監局	【5】図書館	【6】南校舎：411-477、ホール、ザ・カフェテリア
【7】三田演説館	【8】大学院校舎：311-375B	【9】第1校舎：101-147
【10】研究室棟	【11】労働組合本部	【12】西校舎：501-545、ホール、山食、学生食堂（生協）
【13】南館：2B11-2B42	【14】生協購買部	【15】西館
【16】南別館：アート・スペース		

（出典：慶應大学ホームページ）

慶応義塾　赤レンガの図書館旧館

（撮影：松本泰生）

近年、慶應義塾大学も校地が手狭になり、創立150周年記念事業も兼ねて21世紀を先取りするようにとして、情報系学部（SFC）を神奈川県藤沢市に造りましたが、三田の丘に造られた義塾の本部キャンパスの姿形には、日本最古の私立大学としての精神的ゆとりと、誇りが現れているように感じます。

２．早稲田大学キャンパス

新宿区戸塚に在る早稲田大学キャンパスは創立 1882（明治 15）年以来、次の４期を経て、21 世紀、新しい節目、グローカルユニバーシティ期を迎えていると考えることができます。

1）創立・拡張期　1882（明治 15）年～
2）充実期　1915（大正 4）年～
3）戦争・戦災期　1941（昭和 16）年～
4）戦災復興・膨張期　1950（昭和 25）年～
5）21 世紀、グローカル（グローバル＋ローカル）・ユニバーシティ期　2001（平成 13）～

１）創立・拡張期　1882（明治 15）年～

早稲田大学は、19 世紀末明治 15（1882）年に東京専門学校として、大隈重信によって創立されました。場所は都の西北、早稲田の田圃の中で、大隈邸に隣接した素朴な木造校舎でした。

東京専門学校は政治・経済学科、法律学科、理学科の３学科、生徒 80 名での出発でした。８年後に文学科が新設され、東京専門学校が早稲田大学に改称されたのは明治 35（1902）年です。大学となった明治から大正にかけて、校地を大きく広げて校舎（木造）の増築を図りました。

２）充実期　1915（大正４）年～

明治末から大正期、一定の拡張期を経て、昭和７（1932）年、創立 50 周年に至って早稲田のキャンパスは大学の顔となる大隈講堂と図書館を建設し、ようやく大学らしい雰囲気を持つ景観を創り出すことが出来ました。

大学キャンパスの主な建物の設計は、明治 43（1910）年に開設された理工科建築学科の教授らによってなされました。図書館（現在は會津八一記念博物館）は今井兼次、ゴシック様式の大隈講堂は佐藤功一、佐藤武夫の設計によるものです。共に現在、国指定有形文化財となっております。

今や早稲田の顔となった大隈講堂の王冠風の時計塔は 125 尺（約 38m）に設計されておりますが、これは大隈重信の人生 125 才説「人生は本来 125 才までの寿命を有している。適当なる摂生をもってすればこの天寿をまっとうできる」に由来しているのです。

早稲田大学の建築学科は明治 43（1910）年に創設され、工部大学校造家学科（明治 10 年）を起源とする東京大学建築学科に次ぐ、日本で二番目に古い歴史を持ちます。初代建築学科主任に、ジョサイア・コンドル、辰野金吾直系の新進の佐藤功一を迎え、人材を集め、早稲田の建築学科は日本の建築教育に一定の役割を果たしてきました。

３）戦争・戦災期　1941（昭和 16）年～

早稲田大学のキャンパスは、戦前、内容、体裁ともに充実期を迎えましたが、戦争―第二次世界大戦は日本の国土を焦土と化しました。

早稲田大学キャンパスも米軍の空爆により被爆し、図書館や大隈講堂は残りましたが、木造校舎の多くは焼失しました。

この戦争は、若い多くの大学生の命を奪いましたが、戸塚球場では最後の早慶戦と学徒出陣の壮行会が行われました。

４）戦災復興・膨張期　1950（昭和 25）年～

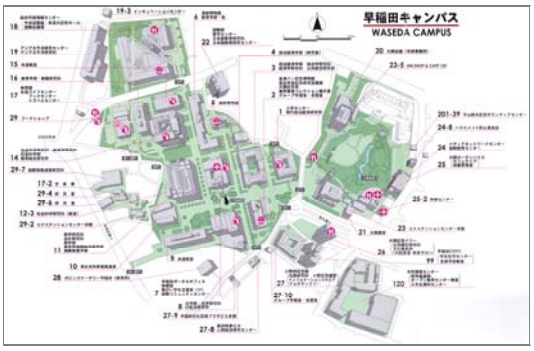
戦後、昭和 20 年以降、早稲田大学もいち早く「早稲田文教地区計画」に取り組み、キャンパスの再建に向かいました。

焼失した木造校舎に代わって、コンクリート造校舎を造り、学生の急増の中、狭くなった戸塚キャンパスから文学部を戸山に、理工学部を大久保に移転させました。この間、1960 年、1970 年には早稲田キャンパスにも学園紛争の嵐が吹き荒廃した時期もありましたが、1980 年、90 年代と、戦後ベビーブーム世代を受け入れてキャンパスは膨張し、拡充を続けてきました。

５）21 世紀、グローカル（グローバル＋ローカル）・ユニバーシティ期　2001（平成 13）年～

早稲田大学も 20 世紀末から留学生を含む学生数の増加と情報革命の大波を受けて、キャンパスの再開発を続けております。

早稲田大学キャンパスの現在（2013）



（出典：早稲田大学キャンパスガイドマップ）

旧図書館に代わって戸塚球場跡に大型の中

央図書館–総合学術情報センターが造られ(平成３（1991）年）、５層の低層校舎も15、16層の高層建築に建て替えに向かっております。

３．早稲田キャンパス、第２世紀、125 周年記念プロジェクト

2007（平成19）年、早稲田大学は創立125周年を迎えました。125 周年とは、創設者大隈重信が唱えた人生125才説に基づくもので、大学の１世紀となる特別な年とされ、この創立記念日、10月21日には、内外の招待者300名を集め、記念会堂で盛大な式典が行われました。白井総長共々に早稲田人はこれまでの大学の歴史を総括しながら、次の早稲田第２世紀へと向かうことを誓い合いました。

この125周年記念事業として大隈講堂前の正門前広場整備計画と一体的に大隈記念タワー及び小野梓記念館の設計があり、私自身、大学からの指名によってこれにあたりました。

大隈庭園を介して125尺の大隈講堂と250尺の大隈記念タワーの2ショット

まず、大隈記念タワーについては早稲田が次なる125年に向かって生き抜くことを願って、250尺（125尺＋125尺）の塔を125尺の大隈講堂に寄り添うように設計しました。片流れの屋根には３つのW(Waseda、World、カシオペアのWの星座）を画き、250尺の塔頂に稲の象形文字を掲げました。

大隈公の望んだ125尺フロアには大隈記念室、最上階には校友サロンと市民にも開放される展望レストランがあり、晴れた日には、100km先の富士山、60km先の筑波山を遠望できます。大隈公の片腕として活躍した小野梓の名を冠した記念館は南口商店街と高さを揃え、街路をモール化し、この通りを挟んで向かい合う旧図書館の腰折れ屋根に合わせて、銅板葺きのマンサード屋根としました。地下には400席ほどの演劇ホールが設けられております。

早稲田第２世紀のキャンパス計画の考え方は、保存すべき建築や景観と、手狭になり機能的にも劣化した建物の更新を調和的に組み合わせることをめざすものです。これをキャンパスがもついくつかの軸に整理して、保全と開発を行うことを試みているのです。

今後も保存、保全するべき建築は戦前、シェークスピア劇場を模した演劇博物館、旧図書館（現會津八一記念博物館）、早稲田キャンパスで最も古い甍の校舎１号館、そして大隈講堂です。

大隈講堂の外壁のスクラッチタイルは近年剥落があり、125 周年記念に合わせて全面的に張り替えております。

250 尺の大隈記念タワー、マンサード屋根の小野梓記念館は、街にもつながる早大正門前広場を含む歴史継承ゾーンの中での計画でした。

大学の歴史的景観として欠かせない大隈庭園は、早稲田にとって大きな財産であり、貴

重な緑空間です。元々、大隈重信の邸のあった場所で、大学の歴史に関する様々なエピソードを持っております。

大隈庭園内には小柄な大隈重信夫人像がキャンパスの真ん中に在る学祖大隈重信公の銅像と向き合う様に配置されているのです。

４．21 世紀、街と交叉するグローカル・ユニバーシティ

日本は第１の変革期－19 世紀後半の産業革命・明治維新、第２の変革期－第二次世界大戦の敗戦・戦災復興、平和憲法を根底に据えた民主国家づくり、そして 21 世紀、第３の変革期－情報革命の進展・国際化・少子超高齢化に直面しております。

福島原発事故を含む、3.11 の東日本大地震災も国土、国家の安全、安心を根底から問い直しております。

急速な情報化が張り巡らす情報の網は、交通網と重なって地球をマスクメロンの様に包み込んでおり、国家の在りようそのものが問い直される事態となっております。

知の拠点としての大学は、この文明史的転換に一定の役割を具体的に果すことが求められております。

早稲田大学の場合、情報化と一体になって現れる国際化については国際教養学部を新設し、大学間、海外協定校 367 校（2014 年２月 1 日現在）を数え、人と情報の交換を日常的に行っております。また、海外からの留学生は年々増加し、2012 年度には 3,996 人（2013 年 11 月１日現在）を数えました。今年４月には留学生と日本人学生が寝起きを共にする国際コミュニティプラザを中野に開設しました。

早稲田大学にあって近年の大きな変化はキャンパスが社会人学習の場となっていることです。今年、このプログラムに参加している社会人は３万人にも及んでいるのです。

学問、教育も、人生の初期にのみ受けるものではなく、まさに生涯に及ぶものであることが示されているのです。

早稲田大学はその出発点から街中につくられ、門のない庶民の大学でした。

このことも大学キャンパスにおいて社会学習が盛んなことに関係していると思われます。キャンパスはまた、19 世紀、20 世紀、周辺の商店街と交叉し、発展してきました。

21 世紀の大学の内容も器も、平和を願う地域に根ざしてこそ、この地球的文明状況に呼応することができることでしょう。早稲田に限らず世界の大学もまた、「グローカル」な存在だと思うのです。

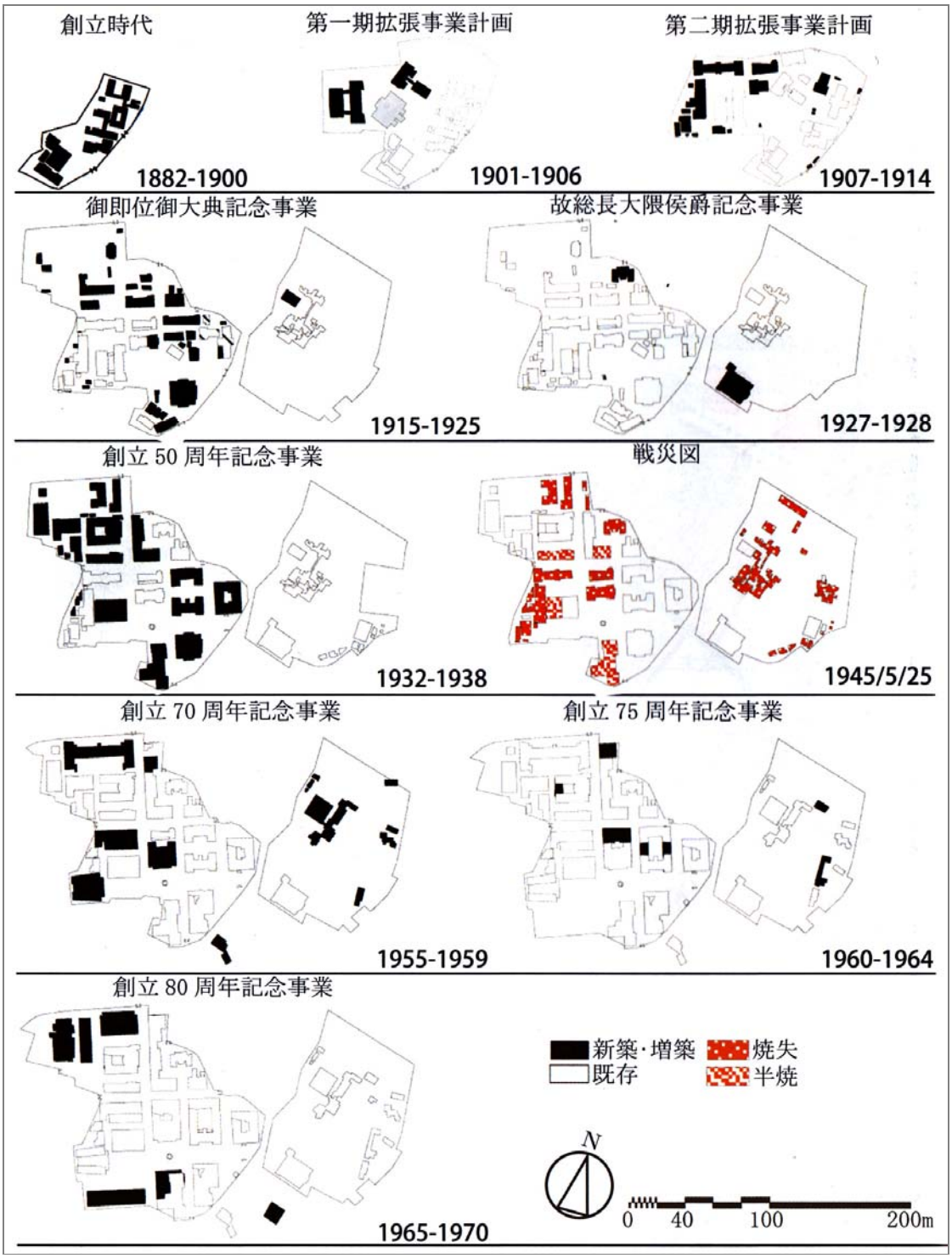
創立 125 年を超え、150 年に向かい、そして 21 世紀を跨ぎ越えて、早稲田の第２世紀、2132 年に風呂敷を広げながら、早稲田の森の中に街をまるごと含んで、早稲田大学は 21 世紀のかたちづくりを続けてほしいものです。これには地域にあるいくつもの大学との連携も視野に入れるべきでしょう。

700 校に及ぶ日本の大学においても地域的に連帯して我が国が直面している難題に自らのキャンパスづくりと共に立ち向かってゆくに違いなく、「格」のある２１世紀の日本のかたちづくりを下支えしてくれるものと期待されます。

（2014.05.25）

早稲田大学　本部キャンパスの変遷

（1882 年～1970 年）



（出典：「新宿区景観まちづくりガイドブック（06 戸塚地区）平成 21 年度版」）